

沖縄県の幼稚園における「宮良長包音楽」の実践状況と方向性(2)* — 保育実践への可能性を探る —

大山伸子**

Abstract

筆者は、先行研究である「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践状況と方向性(1) - 幼稚園教諭へのアンケート調査に基づいて -」^(註1)において、データに基づく結果を踏まえ、沖縄県の幼稚園における「宮良長包音楽」の実践状況と課題および方向性について論述した。

その結果、「宮良長包音楽」の実践率は28.8%と幼稚園現場においては、ほとんど実践されていないことがわかった。しかし、アンケートの回答から得た現場の実態は、決して「宮良長包音楽」を否定的に捉えているのではなく、むしろ肯定的に捉えていることが明らかになった。

本論文では、前述論文の後続研究として、1. アンケート調査のデータから見える実態を「実践プロセス概念図」で概念的に示し、構造的に課題を浮き彫りにする 2. 幼稚園現場の実践事例を取り上げる 3. 活用し得る教材・資料の開発を試みる、という3つの視点から、「宮良長包音楽」を幼稚園現場で実践ならしめる可能性を探ることを眼目とする。

研究結果として、多くの幼稚園教諭が、「宮良長包音楽」に親しみをもち、身近に感じていることがわかったが、実践に至る局面においては、取り組みにくい深刻な実態が顕著であった。

また、50代教諭が、「宮良長包音楽」の実践を“中核層”として支えていることが明らかになったが、幼稚園教諭の次世代にどのように継承していくか、大きな課題である。

幼稚園現場の実践事例として、沖縄市立北美幼稚園と西原町立西原東幼稚園をモデルとして取り上げたが、両幼稚園で実践している「安里ユンタ」が、地域交流や祖父母と幼児の世代間をつなぐ重要な役割を果たしていることがわかった。

さらに、実践困難な理由が「教材・資料が少ない」という多くのアンケート回答に着目し、教材・資料開発の試作として、「すみれ」、「牛」を編曲し、その指導方法を提示した。

I. アンケート調査のデータに見る「実践プロセス概念図」から課題を浮き彫りにする

筆者の先行研究、「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践状況と方向性(1) - 幼稚園教諭へのアンケート調査に基づいて -」の16項目について明らかになったデータ結果では、「宮良長包音楽」の実践率は28.8%（実践44名/回答者153名）で、非実践率（109名/153名）に比べて極めて低いといえる。その実践状況の背景について、前述したアンケート調査の16項目の内、実践率と課題の関連性が高いと思われる6項目を抽出し、「実践プロセス概念図」を作成、実践が困難な課題を浮き彫りにし、今後の保育実践への可能性を探る。

1. アンケート調査のデータに見る「実践プロセス概念図」

【図1】の「実践プロセス概念図」(1)～(6)を、底辺から上方へ段階的に見てみよう。

*The Direction and Circumstances in which Choho Miyara's Music is Practiced in Kindergartens in Okinawa Prefecture (2)

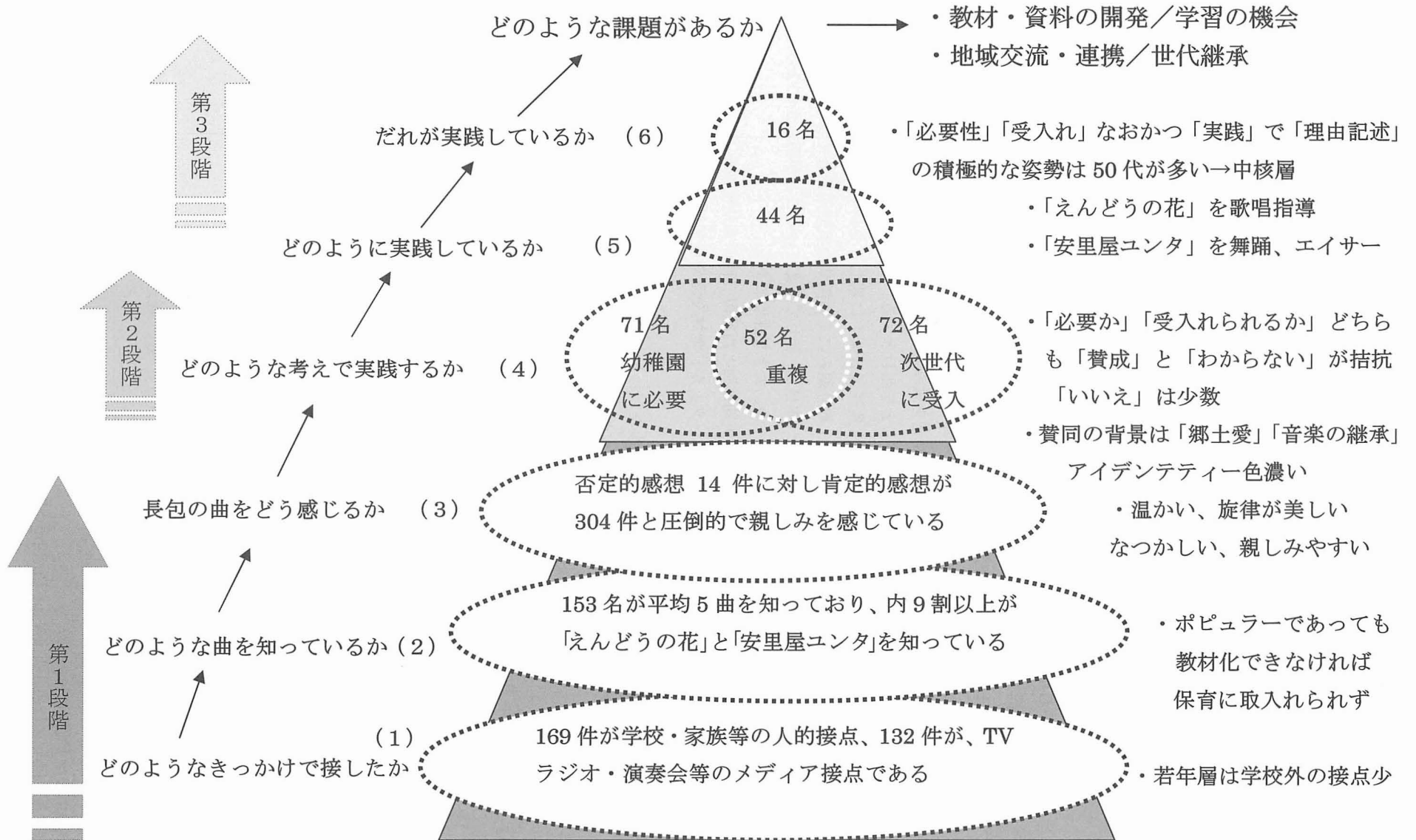
— Exploring Possibilities for Putting Miyara's Music into Practice in Kindergarten Education —

**Nobuko Oyama

【図1】「実践プロセス概念図」

大山作成

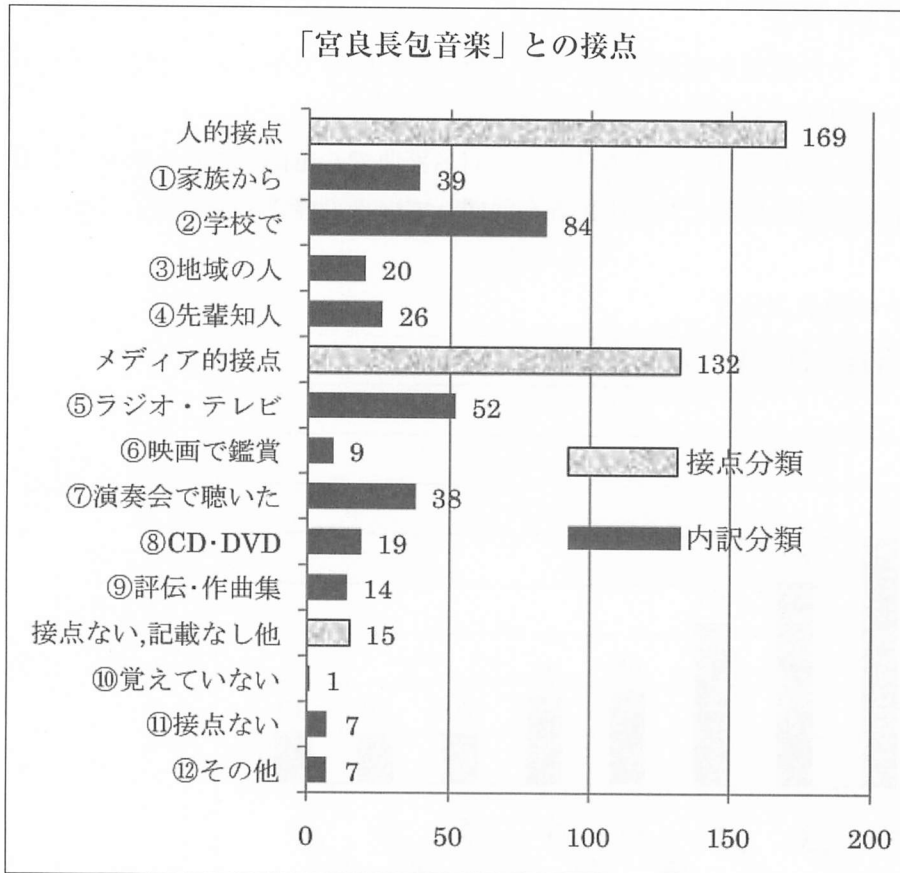
～実践に至るプロセス～



第1段階 → (1) どのようなきっかけで接したか、(2) どのような曲を知っているか、
(3) 長包の曲をどう感じるか

(1) 「どのようなきっかけで宮良長包音楽に接したか」について、人的接点（学校・家族・先輩知人・地域）が169件、メディア接点（TV・ラジオ・映画・演奏会・CD・DVD・評伝・作曲集）が132件あり、接点なし、覚えていない、その他は、わずか15件である^(註2)。「接点がある」の総数301件を見てみると、幼稚園教諭は「宮良長包音楽」を極めて身近に感じていることがわかる。【図2】

【図2】「宮良長包音楽」との接点



また、「学校で教わった」以外の人的接点数を年代別に見てみると、20代では24名中8件（一人当たり（0.33）、30代では32名中18件（0.56）、40代では26名中11件（0.42）、50代では71名中48件（0.68）で、50代に比べて20代は人的接点が少ないことがわかる。

この結果は、若年層になるにつれて、人を介して「宮良長包音楽」を知る機会が減少しているといえる。【表1】

【表1】「長包音楽」と「学校で教わった」以外の年代別人的接点数

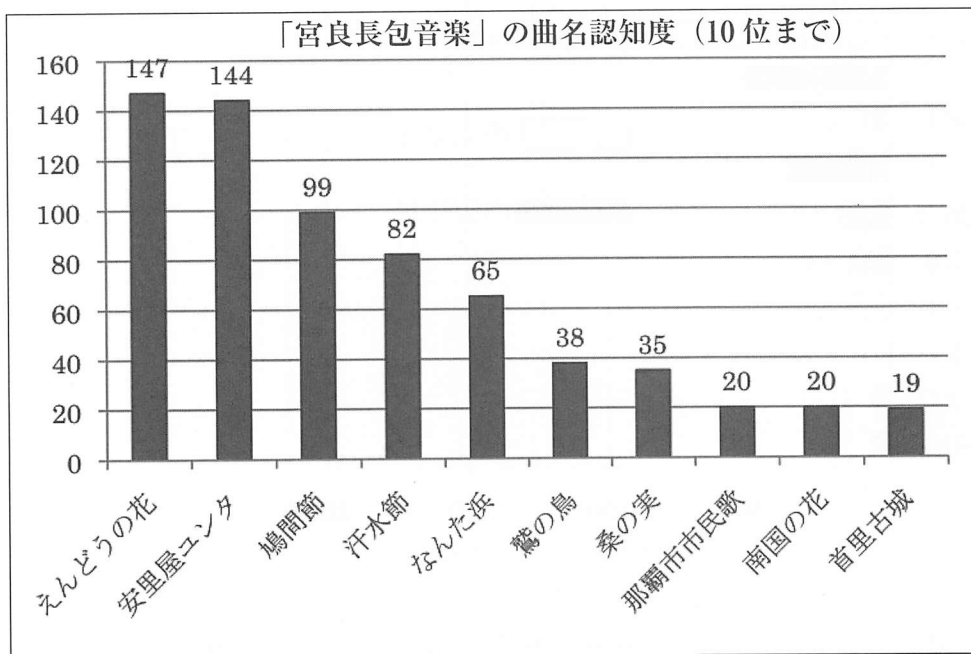
	20代(24名)	30代(32名)	40代(26名)	50代(71名)	合計(153名)
人的接点数	21	38	28	82	169
(内、学校で教わった以外)	8	18	11	48	85
(1人当たりの接点数)	0.33	0.56	0.42	0.68	0.56
家族から教わった	4	7	8	20	39
地域の人に教わった	3	5	2	10	20
先輩・知人から教わった	1	6	1	18	26

(2) 「どのような曲を知っているか」について、「宮良長包音楽」の曲目認知度は、曲の順位を 1 番～10 番目まで列記すると、「えんどうの花」、「安里屋ユンタ」、「鳩間節」、「汗水節」、「なんた浜」、「鷺の鳥」、「桑の実」、「那覇市市民歌」、「南国の花」、「首里古城」となっている【図 3】。回答者数 153 名中（累計回答曲数 786 件）、一人平均知っている曲数は 5 曲であり、そのうち 9 割以上が「えんどうの花」（147 件／96%）と「安里屋ユンタ」（144 件／94%）を知っていることが分かった^(註3)。また、その 2 曲は、教材として、もっとも活用度が高い結果も出ている^(註4)。しかし、4 番目の「汗水節」を除く 3 番目の「鳩間節」や、5 番～10 番目の曲については教材に使われておらず、それらは教材化が難しいという判断ができるだろう。つまり、ポピュラーでよく知っている「宮良長包音楽」の曲であっても、教材化が難しい曲は、実践の活用度が低くなっているといえる。

この結果は重要であり、その課題を解決するために、教材化に向けてモデルとなるようなサンプルや、指導の工夫が不可欠である。

また、3 番目の「鳩間節」と 6 番目の「鷺の鳥」は、同名異曲で八重山民謡にもあり（民謡は「鷺の鳥節」）、回答者が長包の作品と八重山民謡を混同している可能性もあるだろうか。

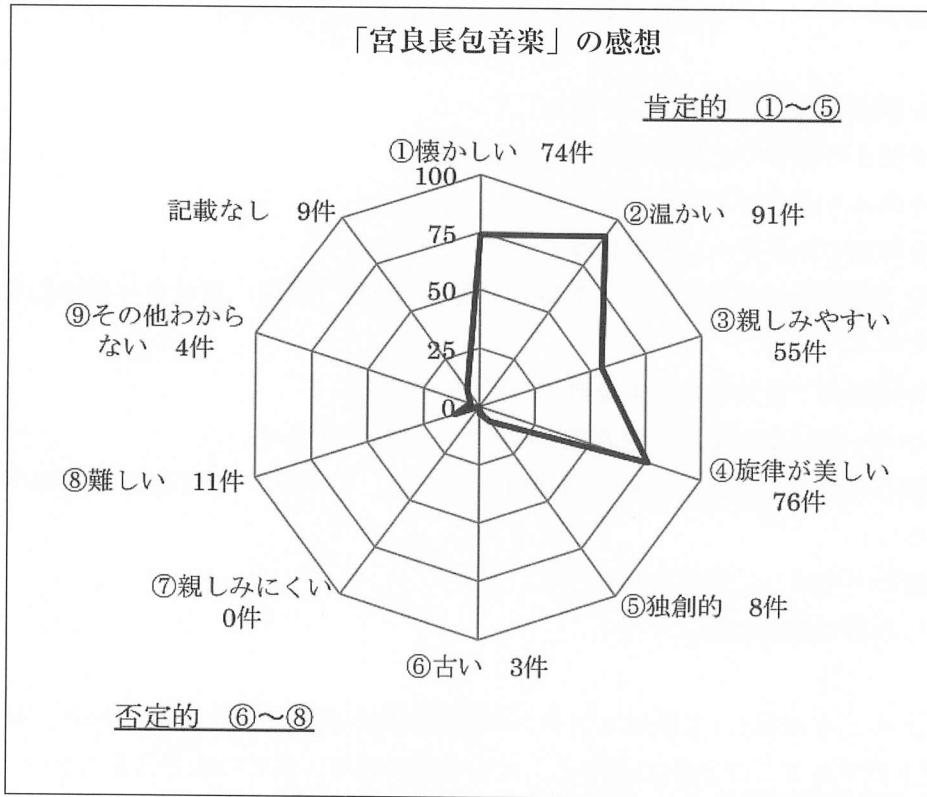
【図 3】「宮良長包音楽」の曲名認知度



(3) 「長包の曲をどう感じるか」について、「宮良長包音楽」についての感想は、肯定的感想（懐かしい・温かい・親しみやすい・旋律が美しい・独創的）が 304 件である。内訳は「①懐かしい」74 件、「②温かい」91 件、「③親しみやすい」55 件、「④旋律が美しい」76 件、「⑤独創的」8 件となっている。否定的感想（古い・親しみにくい・難しい）は 14 件で、内訳は「⑥古い」3 件、「⑦親しみにくい」0 件、「⑧難しい」11 件となっている。他方、「わからない」4 件、「記載なし」9 件であった。^(註5)

「否定的感想」⑥～⑧の 14 件より、「肯定的感想」①～⑤の 304 件が圧倒的に多く、「宮良長包音楽」を好意的に感じていることが明確になっている。【図 4】

【図4】「宮良長包音楽」の感想



第2段階 → (4) どのような考えで実践するか

(4)「どのような考えで実践するか」について、「幼稚園に取り入れる必要があるか」の回答には、71名が「はい」と答えており、「これからの世代に受け入れられるか」の質問にも72名が「はい」と答えている。さらに、いずれにも、「はい」と答えた回答は52件であった【表2】。その52件は、「宮良長包音楽」の実践にも積極的で、前向きであると判断できる。ただし、「わからない」も、「幼稚園取り入れに必要」69件、「次世代受入れ」66件と高い数字である。この「わからない」をどう判断するか、実践の可能性を示唆している要素とも考えられる。

【表2】「幼稚園に必要」と「次世代受入れ」に「はい」及びいずれにも「はい」の回答

		幼稚園に必要				合計
		はい	わからない	いいえ	記載なし	
次世代受入れ	はい	(52)	15	5	1	(72)
	わからない	17	47	0	1	66
	いいえ	0	0	0	0	0
	記載なし	2	7	1	5	15
	合計	(71)	69	6	7	153

大山伸子「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践と方向性(1)」p.25 抜粋

第3段階 → (5) どのように実践しているか、(6) だれが実践しているか

(5)「どのように実践しているか」について、実際に実践している44名の回答者の指導内容を見てみよう。

大山伸子「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践状況と方向性 (1) - 幼稚園教諭へのアンケート調査に基づいて -」^(註6) のデータ結果から、一部事例を挙げる。

- ① 「えんどうの花」を歌唱指導やBGMとして活用している。
- ② 「えんどうの花」を預かり保育でお昼寝の時間に聞かせる。
- ③ 「えんどうの花」をおゆうぎ会でクラス全員で歌う。
- ④ 「安里屋ユンタ」を舞踊やエイサー、歌唱指導で実践している。
- ⑤ 「安里屋ユンタ」を「南風原ユンタ」に歌詞を替え、歌唱や琉舞（園児の祖母から指導を受ける）に取り入れている。
- ⑥ 「安里屋ユンタ」を運動会で祖父母の入退場曲として使っている。
- ⑦ 「汗水節」を舞踊やエイサーや、また、敬老会で群読として取り入れている。
- ⑧ 「汗水節」を毎月曜日のボランティア活動の清掃時に曲を流している。（子どもたちは自然に歌に親しんでいる）。
- ⑨ 「汗水節」を方言劇の中で踊りに取り入れている。
- ⑩ 「鷲の鳥」をお楽しみ会で披露した。

アンケートには、「えんどうの花」、「安里屋ユンタ」の実践事例が数多く記述されており、「宮良長包音楽」の認知度上位であるこの2曲は、教材としても有効に取り入れていることがわかる。

「汗水節」は、歌詞の作者、仲本稔の出身地である具志頭村の具志頭村幼稚園や、その近隣の玉城幼稚園などで実践している事例が見られた。

(6) 「だれが実践しているか」について、実際に実践している 44 名の回答者のうち、さらに、「幼稚園に取り入れる必要性」、「次世代受入れ」、なおかつ、「その理由を記述している」回答者は 16 名いるが、その 16 名が「宮良長包音楽」の実践を積極的に行い、実践を支えていることがわかった。その 16 名の内訳は、20 代 2 名、30 代 3 名、40 代 1 名、50 代 10 名で、ほとんど 50 代が占めている。【表 3】

結果から見える課題として、沖縄県の幼稚園教諭における「長包音楽継承」の世代交代はほとんどなされておらず、深刻な現状である。

【表 3】「幼稚園に取り入れ」「次世代受入れ」なおかつ「実践している」、「理由を記述」

	20代	30代	40代	50代	合計
※1 理由を記述	7	12	9	24	52
※2 次世代に受入れ	7	8	6	17	38
※3 幼稚園に必要	6	4	2	15	27
※4 保育に取り入れ	2	3	1	10	(16)

大山伸子「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践状況と方向性 (1)」p.26 抜粋

2. 概念図から課題を浮き彫りにする

「実践プロセス概念図」の (1) ~ (6) から見えてきたことを列記する。

- (1) 沖縄県の幼稚園教諭は「宮良長包音楽」との接点が豊富である。
- (2) 「宮良長包音楽」を知っている人が一人当たり 5 曲であるが、「えんどうの花」、「安里

屋ユンタ」は9割以上の人を知っていることがわかった。しかし、知っている上位の曲でも、「鳩間節」、「なんた浜」、「鷺の鳥」、「桑の実」、「那覇市市民歌」、「南国の花」、「首里古城」は教材としてほとんど活用されていない。

- (3) 圧倒的に「宮良長包音楽」に好感を持ち、旋律の美しさや独創的であるなど、作品を評価している。
- (4) 「幼稚園に取り入れる必要はあるか」と「これからの世代に受け入れられるか」のいずれにも、「はい」と答えた回答の52名は、「宮良長包音楽」の実践にも積極的で、前向きであるが、回答者(153名/52名)は3割(34%)で極めて少ない。
- (5) 「どのように実践しているか」について、実際に実践している44名(28.8%)の回答者の指導内容から、「えんどうの花」は歌唱指導や踊り指導、「安里屋ユンタ」はエイサーや踊り、歌唱指導、「汗水節」は歌唱、踊り、群読など、教材として取り入れている曲は、ごく限られている。
- (6) 実践している44名の回答の中で、「幼稚園に取り入れる必要性」、「次世代受入れ」、なおかつ「実践している」、「その理由を記述している」の4項目とも回答している人は16名いるが、その16名(10%)が「宮良長包音楽」の中心的役割を果たしている。つまり、全体の1割に当たり、その、ほとんどは50代であり、次世代に引き継ぐ将来的展望が見えにくい。

つまり、「概念図」に見るピラミッド型の第1段階では、(1)～(3)の「宮良長包音楽」にポジティブな意見が多数を占めており、底辺を支えている。

しかし、(4)の第2段階においては52名に減少し、第3段階の(5)の実践的局面に至っては44名で、(6)ではさらに減少し、16名が中核層を形成する過程として捉えられる。

この構図で浮き彫りになることは、①教材・資料の開発 ②「長包音楽」の学習の機会 ③地域との連携・交流の在り方 ④世代継承の緊急性が課題となるだろう。

II. 幼稚園における実践事例

沖縄県の幼稚園現場では、「宮良長包音楽」をどのように実践しているだろうか。

実践のアンケート調査から(大山伸子「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践状況と方向性(1)－幼稚園教諭へのアンケート調査に基づいて－」)、実践している2ヶ園の幼稚園を取り上げ、保育の実際を紹介する。

1. 沖縄県中頭郡西原町立西原東幼稚園

(1) 園の概要

創 立:昭和56(1981)年4月 第一回入園式(近隣の西原幼稚園の園児数増加に伴い新設)
1年保育でスタート
昭和57(1982)年3月 第一回卒園式、91名卒園
平成16(2004)年4月より4歳児受入れが開始され、2年保育がスタート
(戦後のGHQ制度により沖縄県公立の幼稚園は1年保育とされたが、社会的ニーズから県内の公立幼稚園の数か所で2年保育が始まった)
平成22(2010)年4月 入園式・進級式(81名うち4歳児28名)

立地環境：西原町立西原東小学校の敷地内にあり、運動会などは幼少連携で行われている。
近隣に銀行、飲食店、大型スーパーなどがあり、正門から通りに出ると賑わいを見せ交通量も多い。

琉球大学、沖縄キリスト教学院大学・短期大学が近くにあり、特に沖縄キリスト教短期大学保育科の親子支援事業である、「ワイワイプラザ in キリ短」のイベントには、親と子の地域交流が行われている。

指導の重点：地域社会に関連する事項に基づく（平成 22 年度西原東「教育計画」p.8 より抜粋）
・園外保育を通して地域にある施設を訪問したり、地域の人々を園に招待し交流する場を設けたりすることで、優しさや思いやりの気持ちが持てる子に育つようにする。

年間行事：地域との交流に関連する事項に基づく（平成 22 年度西原東幼稚園「教育計画」p.27 より抜粋）

- ・6月 園外保育
- ・7月 守礼の里訪問（2回）
- ・11月 守礼の里訪問 町内幼稚園交流会

観察日時：昭和 22（2010）年 9 月 21 日（火） 8：50～9：20

対象園児：5 歳児ふじ組 26 名

教材曲：「安里屋ユンタ」（作詞 星迷鳥／作曲 宮良長包）

保育内容：「安里屋ユンタ」の踊りの指導

保育の目的：敬老の日に向けてお招き会で祖父母に鑑賞してもらう

（2）活動内容

- ①「安里屋ユンタ」をカセットテープで流しながら、担任が（與那嶺美也子先生）、曲を部分的に取り出し指導する。
 - ・「サーユイユイ」の囃子言葉を繰り返し練習する。
 - ・「マタハーリヌチンダラカヌシャマヨ」の囃子言葉を繰り返し練習する。
 - ・「サー君は野中のいばらの花よ」の曲の最初のフレーズを、お月様を見上げるように両手でポーズを取る動作の練習をする。「大きなお月様を見る」という先生の言葉の合図に合わせて、振り付けを覚える。
- ②「安里ユンタ」の作曲者について（宮良長包）、簡単な説明をする。
- ③テープに合わせて、曲全体を通して、振り付けを仕上げる。
- ④所作がうまくいかない個所を、再度、繰り返し練習する。
 - ・「マタハーリヌチンダラカヌシャマヨ」の所作は、カチャーシー（沖縄の踊り）の手の使い方であることを教える。カチャーシーの手さばきの動作は、いったん前に移動して、バックしながら元の位置に戻る。
 - ・お月様を見上げる動作を何回か繰り返し、動作を合わせる。【写真 1】
- ⑤再度、音楽に合わせて全体を通して仕上げる。
- ⑥練習後は、運動会が近づいているため、園児たちは運動場に移動する。

【写真1】西原東幼稚園園児による「安里屋ユンタ」の踊りの練習



(3) 指導方法の特徴

- ①担当教諭は、踊りの所作を「おつきーさま」と言いながら言葉のリズムを活用して、動きを指導している。
- ②部分的な個所を繰り返し練習し、全体的にまとめている。
- ③使われているカセットテープは、歌詞がオリジナルではなく、子ども用に変えているものであったが、西原東幼稚園で代々引き継がれているカセットテープで、歌詞の作詞者や詳細については不明である、ということだった

以下、星迷鳥（本来の歌詞）の歌詞と、西原東幼稚園で使われていたテープの歌詞を記述する。なお、「安里屋ユンタ」の作品解題については、筆者の研究論文で詳述した。^(註7)

○原詩「安里屋ユンタ」の歌詞（4番までであるが1、2番記載）

作詞 星迷鳥／作曲 宮良長包

（大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』琉球新報社刊、2003、p.116より抜粋）

1. サー君は野中のいばらの花よ
サーユイユイ
暮れて帰れば ヤレホニ
引きとめる
マタハーリス チンダラ カヌシャマヨ
2. サー嬉し恥ずかし浮き名を立てて
サーユイユイ
主は白百合 ヤレホニ
ままならぬ
マタハーリス チンダラ カヌシャマヨ

○幼稚園で使われていた「安里屋ユンタ」の歌詞（筆者によるテープ聞き取り／4 番までであるが 1、2 番記載）

作詞 不明／作曲 宮良長包

1. サー島の子どもは お日様育ち
サーユイユイ
赤いほっぺで ヤレホニ
すぐわかる
マタハーリヌ チンダラ カヌシャマヨ
2. サーでいご咲くころサンゴもひらく
サーユイユイ
花の沖縄 ヤレホニ
夢の島
マタハーリヌ チンダラ カヌシャマヨ

2. 沖縄県沖縄市立北美幼稚園

(1) 園の概要

創 立：昭和 46 (1971) 年 4 月 第一回入園式 学級数 2 園児数 55 名 1 年保育
平成 22 (2010) 年 4 月入園式 学級数 4 (内特別支援学級 1) 園児数 90 名
1 年保育

立地環境：沖縄市立北美小学校の敷地内にある。運動会などは幼少連携で行われている。沖縄高速道路沖縄北インターを出てすぐの国道 329 号沿いにあり、平成 16 (2004) 年に改築された屋根瓦の小学校校舎と園舎がよく目立つ。正門前の通りは交通量がかかなり多いが、周辺は緑豊かな自然に恵まれている。区画整理に伴い新興住宅が急増、大型スーパーや飲食店が立ち並び、生活圏としても便利な立地環境にある。近隣には、「長寿苑」等の老人保健福祉施設があり、北美幼稚園の子どもたちは、年間行事として「長寿苑」を訪問し交流を図っている。

教育課程の編成方針：地域社会に関連する事項に基づく（平成 22 年度北美幼稚園「幼稚園経営」p. 13 より抜粋）

- ・弁当の日を利用して、園外保育を月一回実施し、園外の環境に触れる機会にする。
- ・家庭や地域社会の横の広がり、幼児から高齢者に至る縦のつながりを意識した幼稚園経営を進めていく。

年間行事：地域との交流に関連する事項に基づく（平成 22 年度「幼稚園経営」p. 21、p. 24 より抜粋）

- ・6 月 池原自治会との交流。登川自治会との交流
- ・9 月 長寿苑（老人保健施設）との交流

観察日時：昭和 22 (2010) 年 9 月 17 日 (金) 9:30 ~ 11:20

対象園児：5 歳児 4 学級 92 名

教材曲：「安里屋ユンタ」(作詞 星迷鳥/作曲 宮良長包)

保育内容：「安里屋ユンタ」の歌唱指導

保育の目的：祖父母参観日に祖父母へ歌のプレゼントをする

(2) 活動内容

- ①お招き会会場の北美小学校体育館に移動する。
- ②お招き会の開催に当たり、園長（山田稔小学校校長が兼任）が、敬老の日の意義についてレクチャーを行う。
- ③お招き会プログラムについて、副園長（新里利律子先生）が説明する。
- ④初めに、子どもたちによる「はじめのことは」を沖縄方言で群読する。
- ⑤演目の第 1 番目に設定された「安里屋ユンタ」を、子どもたちが、カセットテープの音楽に合わせながら（北美小学校音楽教諭の入里叶男先生によるシンセサイザー演奏の録音）、おじいちゃん、おばあちゃんに直面して歌う。【写真 2】
- ⑥沖縄のわらべ歌による踊りや、ボールリレー、手話ソングを楽しむ。
- ⑦ 1 時間ほどの演目終了後、園児と祖父母は園舎へ戻る

(3) 「安里屋ユンタ」と子どもの活動

- ①昨年も「安里屋ユンタ」をプログラミングし、前任の校長先生が三線で伴奏をして、子どもたちが歌った。
- ②テープの歌詞は、1～5 番までであったが、原詩は 4 番までであり、この 5 番の歌詞は、沖縄観光の PR のために付け加えられたというのが、いつから 5 番が付け加えられたか、その背景を調査しているところである。^(註 8)

北美幼稚園の園児は、5 番の「沖縄よいとこ一度はおいで」を、「メンソーレ」と沖縄方言に置き換えて歌っていたが、最近、沖縄では一般的に、「メンソーレ」で歌われているので、すでに替え歌として、「メンソーレ」が浸透していると考えられる。

下記に、5 番の歌詞を記述した。

5 番歌詞（北美幼稚園で歌われていた歌詞）作詞者 不明/原詩は 4 番までで 5 番はない)

5. サー沖縄よいとこ一度はおいで

サーユイユイ

春夏秋冬 緑の島よ

マタハーリス チンダラ カヌシャマヨ

※おいでの個所をメンソーレと方言で替え歌にしていた。

- ③近隣の老人保健施設「長寿苑」に園児が出かけ、「安里屋ユンタ」を歌ってお年寄りとの交流を図っている。

【写真2】 北美幼稚園園児による「安里屋ユンタ」の歌を祖父母にプレゼント



3. 両幼稚園における「宮良長包音楽」の活動内容

(1) 共通点

- ・両幼稚園とも「安里屋ユンタ」を教材として活用している。
- ・「祖父母お招き会」、「祖父母参観日」（いずれも敬老の日行事）に活動している。

(2) 指導内容の相違点

- ・西原東幼稚園は舞踊指導、北美幼稚園は歌唱指導で実践している。
- ・「安里屋ユンタ」の歌詞を原詩のものではなく、西原南幼稚園は子供用に変えられた歌詞で歌われ、北美幼稚園は、原詩にはない5番が追加された歌詞を活用していた。

(3) 「宮良長包音楽」と世代のつながり

- ・北美幼稚園は、年間行事の一環として近隣の「長寿苑」に園児が訪れ、「安里屋ユンタ」を歌い、高齢者と交流を図っている。
- ・地域交流の活動の場に活用されている。

両幼稚園における「宮良長包音楽」（安里屋ユンタ）は、祖父母と幼児の世代間を繋いでいる重要な役割を果たしていることがわかった。

Ⅲ. 教材・資料開発の試作提示

宮良長包の作品は、現在までに170曲が確認されている。長包の直筆の作品は、1949年10月10日の那覇市大空襲で焼失し、現存していない。戦後、宮良長包の教え子である糸洲長良氏、外間永律氏や長包の長女、譜久村エミさん等によって、約40曲を作曲集に著している。特に、『宮良長包作曲集『南国の花』（沖縄音楽教育協会編、響友社、1956）は、1960年代に学校の音楽教科書の副教材にもなり、長包の作品を広く世に知らしめる牽引力となった。

筆者は、長包の教え子たちが記憶して歌う曲を録音・採譜し、戦火で埋もれた作品を発掘、『宮良長包作曲全集』（琉球新報社刊、2003）に著した。また、その後の研究で、現在までに、170曲が判明しているが、未だ旋律のわからないものもあり、引き続き発掘研究を行っている。

宮良長包の作品は、声楽曲、オーケストラ曲（1曲のみ）、校歌、祝歌、団体歌があるが、

圧倒的に声楽曲が多い。そのうち、ピアノ伴奏付きの曲は25曲で、単旋律のみの作曲がはるかに多い。

幼稚園現場において実践が難しく、教材化しにくい理由は、①原曲に伴奏譜が少ない ②幼児向けの曲が少ない、などに起因しているのではないかと推測できる。

そこで、「すみれ」と「牛」を選曲し、単旋律（原曲）に伴奏を付け、指導例を試案して、教材の試作を提示することとする。

1. 「すみれ」（1915-8年＝大正4-7年）作詞 新垣菊子／作曲 宮良長包

(1) 曲解説

- ・作曲年に4年の間隔があるのは、断定できる作曲年が不明であり、推定作曲年と位置付けているからである。宮良長包が沖縄県師範学校附属小学校に勤務していた1915年から1918年を、その裏付けとした。「すみれ」の作品解題は、筆者論文で詳述した。^(註9)
- ・作詞者は、当時、小学校3年生だった新垣菊子で、長包が沖縄県師範学校附属小学校に勤務していた時の教え子である。
- ・曲は、へ長調、2/4拍子、16小節、単旋律で、出だしが8分休符で始まり、8分音符、16分音符で構成され、軽快ではつらつとした曲想である。1番の歌詞は、《キクコさん》が《すみれさん》に話しかけている場面で、2番は《すみれさん》が《キクコさん》に話しかけるという場面設定を取っている。詞の内容は、《すみれさん》と《キクコさん》を登場させ、《すみれの花》と《菊の花》を比喩的に表現、植物を擬人化して二人の会話のやりとりをリズムミカルに愛らしく表現している。^(註10)
- ・歌詞の特徴は、ですに、おもうて、もちと、等の大人ことばが混在している。

(2) 編曲について【楽譜1】

- ・原曲はト長調だが、幼児が歌い易いように、本論文ではへ長調に移調した。
- ・幼児が歌いやすいように、右手は旋律、左手は伴奏とした。
- ・主要和音を中心に、単旋律（原曲）に伴奏譜を付けた。
- ・左手の伴奏型は、オルターネイティングベースで軽快なリズムにした。
- ・伴奏がいろいろなヴァリエーションで表現できるように、コードネームを付けた。

(3) 指導の例

①歌唱の楽しさを味わう

- ・AグループとBグループに分かれ、1番をAグループ、2番をBグループが歌い、掛け合いを楽しむ。

②リズム奏を楽しむ

- ・簡易楽器（タンバリン・すず・カスタネット）でリズム奏を楽しむ。【楽譜2】

【楽譜1】 すみれ 作詞 新垣菊子 / 作曲 宮良長包 / 編曲 大山伸子

すみれ

新垣菊子 作詞
宮良長包 作曲
大山伸子 編曲

The musical score is written in 2/4 time with a key signature of one flat (Bb). It consists of four systems, each with a vocal line and a piano accompaniment. The piano accompaniment features a steady bass line and chords in the right hand. The lyrics are provided in two versions: a first version (1.) and a second version (2.).

1. まだまだ はる じゃ ない です に
2. あらそう です に キクコさん

なぜそう は や く さ い た ら しょう
あんまり あた た か さ す ぎ た ら の で

あ な た ま ち が て さ い た ら しょう
はる な と お も う て さ き ま し た

も ち と ね む つ て ら つ し ゃ い な
そ れ じ ゃ は る ま で ま ち ま しょう

【楽譜2】「すみれ」 リズム奏創作 大山伸子

すみれ (リズム奏) リズム譜作成 大山伸子

2/4

タンバリン すず タンバリン すず
 タンバリン すず タンバリン すず
 カ斯塔ネット すず
 タンバリン すず タンバリン タンバリン&すず
 カ斯塔ネット

2. 「牛」(1924年=大正13年) 作詞 南満州教育会教科書編集部/作曲 宮良長包

(1) 曲解説

- ・作詞者についてはこれまで、「南満州教育会」とされてきたが、筆者の調査結果により、正しくは、「南満州教育会教科書編集部」であり、筆者論文「宮良長包の音楽教育活動に関する研究(4)－作品研究Ⅳ(明治・大正編)－」で明らかにした。^(註11)

『満州唱歌集』(南満州教育会教科書編集部・昭和8年10月)にも「牛」が収録されているが、長包の「牛」と旋律は異なるものの、歌詞はほぼ同じである。

原詩の出典は不明だが、時系列に見ると、『満州唱歌集』の発行より(昭和8年)、長包の作曲年(大正13年)が先行しているから、「牛」の歌詞は、大正13年にはすでに存在しており、何かに収録されていた「牛」の歌詞に、長包が旋律を付けたものと推測される。2/4拍子、16小節で単旋律、「ララ 黙って草食べる」の繰り返しが特徴的で、合いの手のように、子どもに親しまれるような個所である。^(註12)

(2) 編曲について 【楽譜3】

- ・原曲は、ト長調だが、幼児が歌い易いように本論文ではヘ長調に移調した。
- ・幼児が歌い易いように、右手は旋律、左手は伴奏とした。
- ・主要和音を中心に、単旋律(原曲)に伴奏譜を付けた。
- ・牛の大きさ、重さ、ゆったりしたイメージを表現するために、右手のメロディの所々を重音にし、左手伴奏に2分音符のオクターヴ音や和音を構成した。
- ・伴奏型がいろいろなヴァリエーションで表現できるようにコードネームを付けた。

【楽譜 3】 牛 作詞 南満州教育会教科書編集部 / 作曲 宮良長包 / 編曲 大山伸子

牛 南満州教育会教科書編集部 作詞 大山伸子 編曲
宮良長包 作曲

お やう し こう し だ まつ て く さ た べ る ラ ラ
だ まつ て く さ た べ る く さ の は な だ ん ま り
し ろ い く も だ ん ま り ラ ラ し ろ い く も だ ん ま り
だ ん ま り だ ん ま り だ ん ま り ^{8va}ラ ラ だ ん ま り だ ん ま り だ ん ま り

(3) 指導の例

①歌唱の楽しさを味わう

- ・「親牛子牛だまって草食べる」をAグループが歌い、「ララだまって草食べる」の個所をBグループが歌って、掛け合いを楽しむ。
- ・「親牛」をf（強く）で、「子牛」をP（弱く）で歌い、強弱をつけて抑揚を表現する。

②模倣動作を楽しむ

- ・「牛」の模倣動作を、「親牛」は大きな動作で、「子牛」は小さな動作で自由なイメージで表現する。
- ・「だまって」や「だんまり」は、「シーツ」というニュアンスで唇に指を当てて表現する。

IV. まとめ

今一度、本論文をまとめてみよう。

1. 50代世代が「宮良長包音楽」の実践者の“中核層”として支えていることが明らかになったが、次世代への保育士へどのように継承していくか、大きな課題である。
2. 多くの教諭が「宮良長包音楽」に親しみを持ち、身近に感じていることがわかったが、実践に至る局面では消極的であることが顕著であった。
3. 幼稚園の実践事例は、沖縄市立北美幼稚園と、西原町立西原東幼稚園をモデルとして取り上げ、子どもたちがどのように「宮良長包音楽」に関わっているか紹介した。
4. 両幼稚園の共通点として、「安里ユンタ」を教材として取り上げており、活動の目的は、「お招き会」、「祖父母参観日」（敬老の日）に向けた活動内容だった。
5. 両幼稚園の相違点として、指導内容が、舞踊指導と歌唱指導でそれぞれ行われていた。
6. 「安里ユンタ」は、老人保健施設の「長寿苑」に園児が訪れ、お年寄りと歌唱で交流しているなど、地域交流の場に活用されていた。
7. 「安里屋ユンタ」は、祖父母と幼児の世代間を結ぶ音楽であることがわかった。
8. データ結果における実践困難な理由として、「教材・資料が少ない」という多数の回答が得られたため、教材開発の必要性に着目し、「すみれ」、「牛」を編曲し、「宮良長包音楽」が幼稚園で活用しうる教材曲として試作を提示した。

総括として、「宮良長包音楽」が幼稚園現場で実践され得る可能性を、もっと社会的な広がりと考えてみると、子どもたちの幼稚園生活のみならず、家庭生活、社会生活等の環境に取り入れていく必要はないだろうか。

例えば、宮良長包の故郷である石垣市では、午前8時頃に、一日の仕事の始まりの日課として、「琉球木遣歌」（作詞 新屋敷幸繁／作曲 宮良長包 = 1930年作曲）を流しながら、石垣市役所の宣伝カーが巡回している。さらに、午後5時頃には、「えんどうの花」（作詞 北村重敬／作曲 宮良長包 = 1924年作曲）が一日の仕事の終わりを告げる音楽として、やはり、石垣市役所の宣伝カーが巡回している。

このように、石垣市では、「宮良長包音楽」が生活に根差しており、その事が、八重山（石垣市、竹富町、与那国町）の幼稚園教諭のアンケート回答 92.0%という高回答率に反映されているのではないだろう。

それをヒントにするならば、たとえば、幼稚園の保育開始と終了に「宮良長包音楽」をBG

Mで流し園生活に取り入れると、自然に「宮良長包音楽」に親しみ、実践への方策にも役立つのではないだろうか。

その考えは、街頭の歩道チャイムにも適用できるだろう。

さらに、那覇市内の大型商業施設の公共広場で定時に鳴るカリオンの音楽に、「えんどうの花」を挿入するなど、耳から「宮良長包音楽」に親しむ生活環境があるならば、保育実践に導入しやすいことにもなるだろう。「宮良長包音楽」を生活圏に取り込むことも一提案としたい。

V. おわりに

なぜ、「宮良長包音楽」を浸透させなければならないか。

長包が書き遺した作品の根底にあるものは、沖縄の文化、生活、教育が織り込まれ、沖縄のアイデンティティーそのものである。長包メロディは、沖縄音楽と西洋音楽が絶妙に混ぜ合わさった美しい旋律とリズムであり、時として人の心にやさしく語りかけ、時として勇気を与えてくれる音楽である。命を吹きかける音楽、それこそが「長包音楽」であり、世代を超えて継承されなければならない音楽である。この事は、アンケートデータにも明確に表れ、多くの幼稚園教諭が回答している。幼児の時から、聴き、歌い続ける体験こそ、音楽教育の重要性と考える。そのためには、特別な音楽としての「宮良長包音楽」ではなく、常に身近にある音楽として浸透させたい。

「宮良長包音楽」を実践への可能性として追求することは、「日暮れてなお道遠し」であるが、ひとまず、本論文が保育実践の推進力となれば幸いである。

また、次回の研究では、小学校教諭へのアンケート調査の結果を踏まえ、幼稚園との比較を行うことによって、新たな実践の可能性を探求し構築していきたい。

※本研究論文は、大山伸子「沖縄県の幼稚園における宮良長包の実践状況と方向性（１）－幼稚園教諭へのアンケート調査に基づいて－」（沖縄キリスト教短期大学紀要第 38 号、2010）のアンケートデータを基に、さらに、発展的、多層的に研究、論述したものである。

※「実践プロセス概念図」は、日本音楽教育学会（2010.9.25～26 埼玉大学）において、筆者が研究発表を行った一部分であり、本論文ではさらに追加論述している。

【謝辞】

沖縄県沖縄市立北美幼稚園、および沖縄県西原町立西原東幼稚園にはフィールドワークで大変お世話になりました。また、北美幼稚園の山田稔園長、新里利律子副園長、及び西原東幼稚園の諸見成明園長、西原洋子副園長、ふじ組担任の與那嶺美也子先生、さくら組担任の多和田祥子先生には、ご指導とご助言をいただき、有り難うございました。

【資料・情報提供】 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館、沖縄県立図書館、沖縄県行政情報センター、沖縄キリスト教学院図書館

【助成】 本研究は、沖縄キリスト教学院特別研究助成に拠っています。

【註】

- (1) 大山伸子「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践状況と方向性（１）－幼稚園教諭へのアンケート調査に基づいて－」沖縄キリスト教短期大学紀要第 38 号、2010、p. 3～27
- (2) 同上、p. 7～8、13、23～24
- (3) 同上、p. 11～12、14、27
- (4) 同上、p. 5、13、19～23
- (5) 同上、p. 8、14、24
- (6) 同上、p. 5～6、13、19～25
- (7) 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（６）－作品研究Ⅲ（昭和編・②）－」沖縄キリスト教短期大学紀要第 37 号、2009、p. 38～39、p. 59～60
- (8) 「安里屋ユンタ」の原詩にはない 5 番の歌詞は、「春夏秋冬 緑の島よ」のアンダーライン個所が、野山に花が咲く※【視聴覚資料の 1 参考】と歌われていたり、花見てくらす※【視聴覚資料の 2 参考】など、幾通りもある。
- (9) 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（４）－作品研究Ⅰ（明治・大正篇）－」沖縄県立芸術大学紀要第 16 号、2008、p. 190
- (10) 大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』琉球新報社刊、2003、p. 15
- (11) 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（４）－作品研究Ⅰ（明治・大正篇）－」沖縄県立芸術大学紀要第 16 号、2008、p. 197
- (12) 大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』琉球新報社刊、2003、p. 42

【参考資料】

1. 大山伸子編・校訂『宮良長包作曲全集』琉球新報社刊、2003
2. 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（4）－作品研究Ⅰ（明治・大正篇）－」
沖縄県立芸術大学紀要第 16 号、2008、p.187～206
3. 大山伸子「宮良長包の音楽教育活動に関する研究（6）－作品研究Ⅲ（昭和篇-②）－」
沖縄キリスト教短期大学紀要第 37 号、2009、p.31～60
4. 大山伸子「沖縄県の幼稚園における宮良長包音楽の実践状況と方向性（1）－幼稚園教諭へのアンケート調査に基づいて－」
沖縄キリスト教短期大学紀要第 38 号、2010、p.3～27
5. 「平成 22 年度幼稚園教育計画」（西原町立西原東幼稚園作成）2010. 4 発行
6. 「平成 22 年度幼稚園経営計画」（沖縄市立北美幼稚園作成）、2010. 4 発行

【視聴覚資料】

1. レコード「沖縄民謡 安里屋ユンタ／国頭サバクイ」（安里屋ユンタ）唄／吉里和美・稲嶺八重子・喜納啓子、演奏／ゴモンレコグループ、日本コロムビア（株）
2. レコード「めでたい節／安里屋ユンタ」（安里屋ユンタ）晴海洋子 はやし言葉／白瀬春子・白瀬孝子 演奏／コロムビアオーケストラ、編曲／山路進一、日本コロムビア（株）、1975
3. CD「愛唱歌集」（安里屋ゆんた）唄／城間ひろみ マルフクレコード、1990
4. CD「世界民族音楽大集成 6 南西諸島の音楽Ⅱ」（安里屋ユンタ）唄／大浜みね、通事安京、大浜博起、比屋根孝子、キングレコード（株）、1992
5. CD「南海の音楽／八重山・宮古」（安里屋ユンタ）唄／大浜みね、通事安京、大浜博起、比屋根孝子、キングレコード（株）、1991
6. CD「肝がなさ節」（安里屋ゆんた）唄／饒辺愛子、マルフレコード（株）、1991
7. CD「沖縄民謡名選集 1」（安里屋ゆんた）歌／城間ひろみ、マルフレコード（株）、1990